

形態論超入門

田川 拓海 / dlit[†]（筑波大学人文社会科学研究所 IFERI 研究員）

《形態論(morphology)とは、「語(Word)」についての研究である》

-1. はじめのはじめに

◆何が「超」？

(o) a. 形態論^超入門

b. ^超形態論入門

c. ×形態論入門^超

o. はじめに

(1) 本発表の目的

言語学における「形態論(morphology)」という研究領域を紹介する。

- ・注意点 1. 例は日本語が中心
- ・注意点 2. 理論的には生成文法（+日本語学）寄り

(cf. 認知形態論（吉村公宏編（2003）『認知音韻・形態論』）

o.1. 形態論研究者(morphologist)が（ときどき）思っていること

Morphology is at the conceptual centre of linguistics. ... For this reason, morphology is something all linguists have to know about. ... There is a less enviable aspect to this centrality. ...¹

(Spencer and Zwicky (2001) *The Handbook of Morphology*: 1,
中略、強調は発表者)

[†] E-mail: takumidlit@gmail.com

¹ この後、Morphology has been called ‘the Poland of linguistics’ – at the mercy of imperialistically minded neighbours. と続く。

... But the people that work on word-sized domains are morphologists, and when morphologists talk, linguists nap.

(Marantz (1997): 202, 強調は発表者)

「語」と形態法・形態論の等閑視、「語」の定義棚上げないしは不一致容認の姿勢がながらく続いてきたなかで、三省堂刊『言語学大辞典 第1巻（世界言語編上）』（亀井他編著 1988）の「刊行の辞」に認められた「言語学の本当の対象は、語であると言ってよい」は、けだし人間言語についての深奥を衝いたことばにちがいない。

(宮岡伯人 (2002): 5, 強調は発表者)

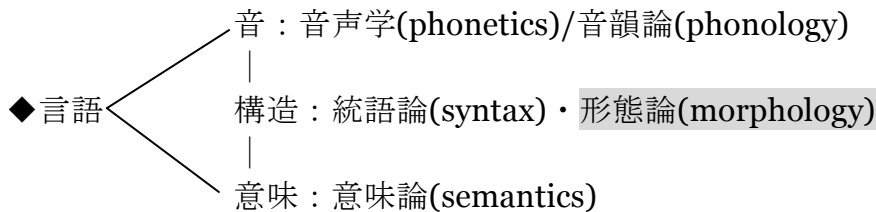
1. 形態論って何？

1.1. 構造を考える：形態論と統語論

◆言語学にはその主な研究対象と方法論/観点によって様々な領域がある。

(2) 言語学の各研究領域（関連領域を含む）

音声学、音韻論、形態論、統語論²、意味論、語用論、文章論、談話分析、文字論、方言学、言語地理学、社会言語学、心理言語学、比較言語学、対照言語学、歴史言語学、…



◆語(word)と文(sentence)：文の素材としての語

(3) 昨日、東京に雨が降りました。

a. /昨日東京に雨が降りました/ →文

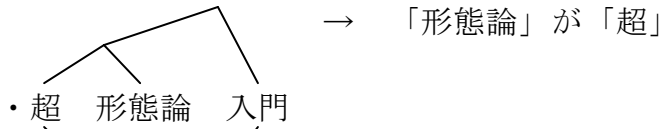
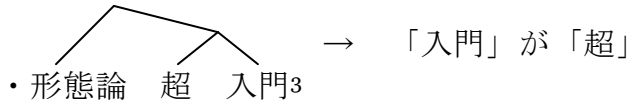
b. /昨日/東京に/雨が/降りました/ →

c. /昨日/東京/に/雨/が/降り/まし/た/ →

² 「文法」という用語は、ほぼ統語論のみを指すこともあれば、統語論と意味論（あるいはそれ以外も）を含むように使う研究者もいてややこしいと思われるので、ここでは使わないことにする。

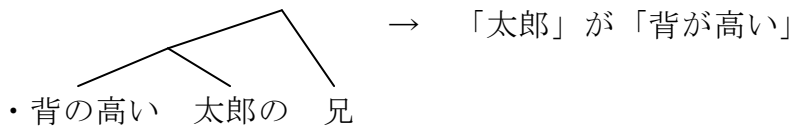
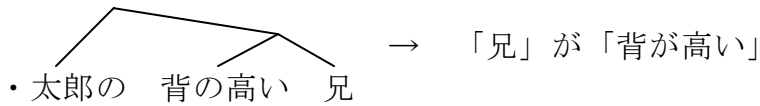
◆ 「形態論超入門」と「超形態論入門」

: 語 (形態論)



◆ 「太郎の背の高い兄」と「背の高い太郎の兄」

: 句 (統語論)



※語のレベルにも句のレベルにも線条的(linear)な観点だけでは捉えられない「構造」がある。

◆ 統語論と形態論の違い：対象とする単位の大きさ

↑ より大きい単位	… 文(sentence) 節(clause) 句(phrase) …	統語論 (マクロ?)
↓ より小さい単位	… 語(word) 形態素(morpheme)	形態論 (ミクロ?)

³ この場合に「形態論」と「超」が先に関係を持ってないのは、「超」が接頭辞(prefix) (後述) だからだと思われる。

◆言語研究における「証拠」は主に「音」か「意味」である。(統語論/形態論で扱う)「構造」はその「音」か「意味」に関する現象から導かれる、という点⁴で、統語論/形態論はもともと抽象的な性格を持っている。

《形態論とは、「語(Word)」の構造についての研究である⁵》

1.2. 形態論で使う単位や用語

◆形態素と語

(4) 形態素(morpheme)
意味を持つ最小の単位

(5) 自分の不勉強さが浮き彫りになった

a. 不 / 勉強 / さ⁶

b. 浮き / 彫り

c. う / き

→このレベルまで分解してしまうと、意味が保てなくなる

(6) 語(word) (暫定版)

一つ、または二つ以上の形態素からなる、独立した形で使用できる言語の単位

(7) a. 形態素

↓

語

b. 形態素+形態素+形態素+...

↓

語

(8) (5a, b)で…

a. 独立して使える : 「勉強」「浮き」「彫り」

b. 独立しては使えない : 「不」「さ」

・それだけでも独立して使える形態素を自由形態素(**free morpheme**)、そうでないものを拘束形態素(**bound morpheme**)と言う。

⁴ 上で取り上げた構造の曖昧性の議論は、「解釈が二つある」という意味的な現象に基いている。

⁵ 実際の研究では、語のレベルに関わる意味論(的現象)についても(統語論の研究においても句以上のレベルの意味論にも言及されることがあるように)形態論の領域で扱われることがある、というが多い。

⁶ 厳密に言うと、「勉強」もさらに「勉」と「強」の二つの形態素に分けることができる。

◆接辞と語の構造

(9) 語基(base)

語の意味的な核になる形態素

(10) 接辞(affix)

語基にくっついて意味を付け加えたり品詞を変えたりする拘束形態素

a. 接頭辞(prefix) : 不 + 払い → 不払い

b. 接尾辞(suffix) : 暑(い) + さ → 暑さ

c. 接中辞(infix)⁸ : ganda ‘beauty’ + um ‘become X’

→ g-um-anda ‘become beautiful’

(Tagalog)

d. 接周辞(circumfix) : Intsik ‘Chinese person’ + ka an ‘group of X’

→ ka-intsik-an ‘the Chinese’

(Tagalog)

・接辞を重ねて付けていくことによって、どんどん大きな語を作っていける。

(11) a. チョムスキー

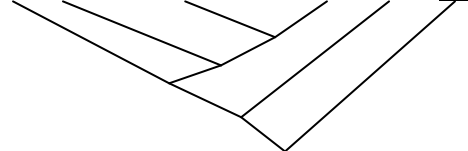
b. チョムスキー派

c. 反チョムスキー派

d. 元反チョムスキー派

e. 元反チョムスキー派らし(い)

f. 元反 チョムスキー 派 らし さ



1.3. 語と文の違い

◆生産性(productivity)

形態論/語のレベルでは、あっても良い、作ることができても良い形がたまたま出てこないことがある。

(12) 文のレベル (句) : 春の風、夏の風、秋の風、冬の風

語のレベル : 春風、夏風、秋風、??冬風

⁷ 「基体」という訳語が用いられることもある。

⁸ 日本語ではオノマトペに現れる促音 (e.g. ぱりぱり → ぱりっぱり)、英語では”fuckin’” (e.g. absolutely → abso-fuckin’-lutely) が接中辞だとする研究がある。

⁹ このような隙間の存在を「偶然の欠落(accidental gap)」、あるいはより形態論的現象に焦点を当てる形では「語彙的欠落(lexical gap)」と呼ぶ。

- (13) 形容詞「丸い」「暗い」から…
+する (句のレベル¹⁰) : 丸くする、暗くする
+める (語のレベル) : 丸める、×暗める

◆形態的な緊密性¹¹(lexical integrity)

語には、文のレベルからの干渉を許さない性質がある。

- (14) 語の一部を修飾できない¹²
a. 熱心 → とても熱心
b. [熱心]さ → ×とても[[熱心]さ]

- (15) 句のレベルの要素が入りこめない
a. 親と子の喧嘩 (句)
b. ×親と子喧嘩 (語)
c. 親子喧嘩 (語)

◆一方で、形態論を考えるにも、統語論のことについて考える必要がある (ことがある)

- (16) a. 食べた : 動詞「食べる」の過去形
b. [太郎がリンゴを食べ]た
→ “太郎がリンゴを食べる” という出来事全体が「過去」

【中間のまとめ】

1. 形態論とは、「語」の構造についての研究である。
2. 文がより小さな語という単位から作られるように、語も形態素というより小さな単位から作られる。
3. 「語」と「文」の世界には、いくつかの違いが見られる。

¹⁰ 「形容詞+する」の形が句のレベルの形成であることは、形容詞が語幹だけでなく「く」という屈折を持つこと、「丸く も/さえ/は する」のように、いわゆる助詞がその間に入り込めることからわかる (cf. ×丸 も/さえ/は める)。

¹¹ “lexical”は「語彙的」と訳した方が一貫性があるかもしれないが、影山 (1993)で挙げられているこちらの訳語の方が概念の内容を分かりやすく表していると考え、採用した。

¹² 影山 (1993)では、このような例は句が語の中に入り込めないことの例として挙げられている。

2. 形態論の様々なトピック（あるいはパズル）

◆形態論では、「語」の世界について、各要素（形態素）の関係、音/意味の特徴、あるいはそれらが「構造」とどのように関係しているのかということが研究のテーマとなる。言語ごと、形態論観（あるいは理論/モデル）ごとに多種多様な話題があるが、ここでは独断でいくつか紹介する。

2.1. 派生（と複合）と屈折

◆語の作り方にはいくつかの種類がある。

(17) 派生(derivation) : 接辞を付けて、新しい意味が付け加わったり、品詞が変わった語を作る過程。

e.g. 勉強 → 不勉強、暑い → 暑がる、

複合(compounding) : 自由形態素同士をくっつけて新しい語を作る過程。

e.g. 殴る + 倒す → 殴り倒す、草 + 木 → 草木

屈折(inflexion) : 語が文法的環境に合わせて形を変える過程。

e.g. 食べる → 食べた(過去)、食べます(丁寧)、食べよう(意志)

・派生と複合を扱う形態論の分野を「派生形態論(derivational morphology)」¹³、あるいは「語構成論/語形成論(word formation)」と言い、屈折を扱う形態論の分野を「屈折形態論(inflexional morphology)」と言う。

(18) 派生・複合と屈折の違い

a. 派生・複合 : 品詞を変えることがある、語彙的な意味を付け加えることがある、生産性にばらつきがある。

b. 屈折 : 品詞を変えない、文法的な意味を付け加える、生産的 (Lieber (2010): 108)

・しかし、派生形態論と屈折形態論の関係が質的なもの（＝どこかで線が引ける）なのか、連続的なものなのかは議論の余地がある。

¹³ 分野の名前とプロセスの名前の関係がややこしいので、ここで言う「派生」と「複合」をまとめて「派生」と呼んで、ここで紹介した「派生」（ああややこしい）は「接辞付加(affixation)」にした方がすっきりすると思う。

2.2. カタチとイミがずれるとき

◆言語学（あるいは文法研究）で面白いテーマの一つとして、形（≒音）と意味の、何らかの形での「ずれ」がある。

(19) 括弧付けの逆理(bracketing paradox)
音と意味の括弧付け(bracketing)がずれる現象/問題

a. unhappier

音 : [un [happier]]

意味 : [[unhappy] er]

b. beautiful dancer

音 : [[beautiful] [dancer]]

意味 1 : [[beautiful] [dancer]]

意味 2 : [[beautiful dance] er]]

(20) 日本語の bracketing paradox の例 (Kitagawa (1986)など)

小首をかしげる

音 : [[小首を] [かしげる]]

意味 : [[小 [首をかしげる]]]

他にも…

小腰をかがめる、小腹がすく、小脇に抱える、薄目をあける、…

2.3. 形態素？

◆それだけでは何をやっているのかわからない形態素がある。

(21) cranberry morpheme¹⁴

a. cranberry ⇔ blueberry, blackberry, strawberry, ...

b. ビー玉 ⇔ 飴玉、お手玉、

・語源的には cran-は“crane”、ビー-は“ビードロ”から来ていると言われるが、上の語の中で明確な意味、文法機能を担っているわけではない。

¹⁴ 宮岡 (2002)はこの訳語に当たるものとして「無意味形態素」という用語を使用している。入門書などではそのまま「クランベリー形態素」や「cranberry 形態素」としているものが多いように見受けられる。

2.4. 再び、形態論と統語論

◆「構造」に関する、という以上に具体的なところで、形態論と統語論は同じ視点を必要とすることがある。

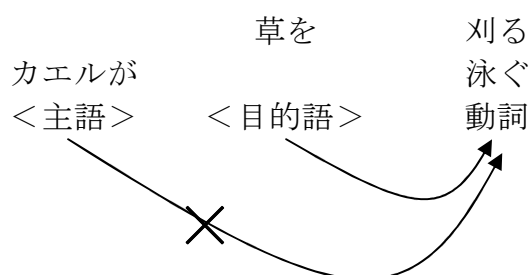
(22) 「草刈り」と「カエル泳ぎ」

a. どちらも形は「名詞+動詞（の連用形）」

b. 草刈り : 草を刈ること

c. カエル泳ぎ : ×カエルが泳ぐこと

: カエルのように泳ぐこと



【まとめ：統語論と形態論】

これまで折に触れ、統語論と形態論の似ているところと違うところについて紹介してきた。それらをどううまく取り扱うかというのも形態論の大きなテーマの一つであり、形態論と統語論は根本的に違う世界なのか、同じような世界の中で連続的に捉えることができるのか、という問題には今も論争がある。

3. 形態論の大問題？：「語」について

◆形態論が「語」についての研究分野だということにはおそらく異論は無いだろう。にも関わらず、「語」の定義については、(統語論で「文」の定義がたいへん難しいように) 諸説ある。

(23) 単語とは、言語に於ける最早分かつべからざるに至れる究意的の思想の単位にして、独立して何等かの思想を代表するものなり。

(山田孝雄 (1908) 『日本文法論』)

...、語という単位は慣用的なもので、普通、語と認められているものには、その性格からいっても、またその機能からいっても、さまざまなものがあって、これを一義的に明確に定義することは困難である。

(『言語学大辞典 第6巻 術語編』:510)

(23) 書かせられたがっていた
kak-ase-rare-ta-gar-te-i-ta

- ・日本語の中に限っても、(23)の表現を1語と考える立場から、最大8語と考える立場までである。

→他の様々な言語まで射程に入れると、確かに一般言語学的に「語」というものを正確に定義することはとても困難に思える。

↓

しかし、これまでも見てきたように、「語」という“レベル”を考えることによって、言語のある側面が捉えられるということはある程度確かであるように思える。「語」の定義があいまいだからと言って、様々な言語現象があいまいになるわけではない¹⁵。

- a. ある言語現象群が本当に「語」という概念でまとめられるのか、あるいはそれを「語」と呼んでも良いのか、
- b. 各言語で「語」と呼ばれているものが本当に同一の概念なのか。

というような問題は、理論/モデルの力も使いながら、経験的な議論を積み重ねていくしかないように思う（そして「語」について少しずつ分かるようになれば良いな）。

4. おまけ：理論、あるいはモデル

◆形態論にもいくつかの理論/モデルがある。

(24) a. Item and Arrangement (IA) Model

語の形成を、形態素をくっつけること（足し算）によって取り扱う。（生成文法）統語論の研究と相性が良いが、母音変化などの現象に弱い。

e.g. open + ed → opened, sing + ? → sang

b. Item and Process (IP) Model

語の形成を、核となる語基と語形成規則(word formation rule)で取り扱う。母音変化に強いが、IAモデルの持っていた統語論との相性の良さは消えてしまっている。

c. Distributed Morphology (DM)

IAとIPの良いとこどりの第三の形態論¹⁶（と提唱者は言っている。）

¹⁵ 時には捉え方を間違ってしまう原因などにはなるかもしれないが、このように、「語」には「概念」と「現象をまとめるラベル」という二つの観点があることに納得すれば、「語が定義できないと形態論の研究は始められない」というようなところにははまらないで済むのではないか（と思いたい）。

¹⁶ むしろ、第三の形態論のモデルとしてはWord and Paradigmモデルを挙げるべきかもしれないが、発表者の力不足により割愛<(_)> @taiki_wgerさん、よろしくお願いします。

◆分散形態論(Distributed Morphology)についてちょっとだけ

(25) DM は…

- a. 「語」はそれぞれの文法的/意味的特徴と、それに対応する音韻的特徴がセットになった形で辞書部門(**lexicon**)に登録されている。
- c. 「食べ(る)」は動詞、「猫」は名詞である、ということも最初から辞書部門に登録されている。
- b. 「語」と「文」の世界は根本的に違うものである。
という考えを**取らない**文法モデルである。

DM の特徴

- a. 形態論 (語) と統語論 (文) を連続的に捉える。
- b. 生成文法における理論の一つである。
- c. 統語論の研究成果を破棄しない形で、形態論もなんとかやっていきたい。

◆DM は主に三つの視点から位置付けることができる。

1) 新しい形態論の理論 (モデル)

→IA モデルと IP モデルの困難を統語論との関係も視野に入れながら克服

2) Anti-lexicalism

→「語 (形成)」は **lexicon**、「文 (形成)」は **syntax** という二分を見直す

3) Minimalist Program における形態論

→最近の生成文法のモデル (Minimalist Program: MP) では **lexicon** とのインターフェイスであった **D** 構造が破棄されてしまったため、**DM** が新しい形態論のモデルとして期待されている、らしい。

- **DM** 構築の当初の目的は **1)** だったように思われる。1990 年代後半から **2)** についても積極的にコミットし始めた。**3)** についてはそもそも **DM** 提唱時には **MP** の一つ前の統語論モデルを仮定しており、明らかにそのような目的で作られたものではない。

¹⁷ 現在の **DM** の各研究が **MP** モデルに基いたものにシフトしているのは確かである。

【参考文献】

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.

Kitagawa, Yoshihisa (1986a) “More on bracketing paradox,” *Linguistic Inquiry* 17. pp.177-183.

Lieber, Rochelle (2010) *Introducing Morphology*. Cambridge University Press.

Marantz, Alec (1997) “No escape from syntax: Don’t try a morphological analysis in the privacy of your own lexicon,” *UPenn Working paper in Linguistics* 4(2), pp.201-225

宮岡伯人 (2002) 『「語」とはなにか: エスキモー語から日本語を見る』 三省堂.

Spencer, Andrew and Arnold M. Zwicky (eds.) (2001) *The Handbook of Morphology*. Wiley.

山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館.

吉村公宏編 (2003) 『認知音韻・形態論』 大修館書店.

【読書案内：個人的おすすめ】

† 形態論の入門書として

Lieber, Rochelle (2010) *Introducing Morphology*. Cambridge University Press.

やはり生成文法寄りの立場かと思うが、基本的な概念、問題についてコンパクトながら網羅している。安い。

† 形態論の研究上のトピックについて詳しく知りたい

Spencer, Andrew and Arnold M. Zwicky (eds.) (2001) *The Handbook of Morphology*. Wiley.

形態論でよく取り扱われる現象、理論的な問題点から、いくつかの言語の紹介・記述まで 700 ページ以上をかけて取り上げている。各筆者の立場が色濃く出ているものも。

† 「語」について

宮岡伯人(2002) 『「語」とはなにか: エスキモー語から日本語を見る』 三省堂.

膠着語である日本語と、複統合的な性格を（も）持つエスキモー語から形態論における「語」について考察している。「語」（あるいは形態論）を複数の言語を通してみる重要さと面白さを教えてくれる。

Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) (2002) *Word: A Cross-Linguistic Typology*. Cambridge University Press.

様々なタイプの言語における「語」についての考察が読める。日本語（研究）ではそこまで話題にならない接語(clitic)にかなり焦点が当てられていること、手話における「語」概念への提案もあることなどが特色。

† 日本語の形態論（研究）について

金水敏 (1997) 「4 国文法」『岩波講座 言語の科学 5 文法』 pp. 119-157, 岩波書店.

活用の取り扱い、品詞分類など、日本語学/国語学の文法の重要なトピックには形態論に属する問題が多い。コンパクトにまとまっており、現在の言語理論との関係などについても触れられている。

鈴木重幸 (1996) 『形態論・序説』 むぎ書房.

語と文のレベルを分かち立場から、日本語の形態論について考察している。学校文法活用論批判には貴重な研究史も含まれている。

† 日本語の語形成入門

齋藤倫明 (1992) 『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味—』 ひつじ書房.
生成文法などの特定の言語理論によるものではないが、形態論および語形成研究における基本的な問題に対して、日本語の様々な現象を通して理論的にも深く考察している。

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.

生成文法の立場から日本語の様々な語形成現象について考察し、モジュール形態論を提唱。語彙的/統語的複合動詞の区別、「動名詞+する」の分析など重要な研究に加えて、日本語の様々な現象の記述、指摘は語形成研究の楽しさを教えてくれる。

齋藤倫明・石井正彦編 (1997) 『語構成』 ひつじ書房.

日本語における語形成・語構成研究の基本必読文献集。解説・文献集付き。

† DM への入門

Embick, David and Rolf Noyer (2007) “Distributed Morphology and the syntax/morphology interface,” *The Oxford Handbook of Linguistic Interfaces*. G. Ramchand and C. Reiss (eds.), Oxford University Press.

現行では、最も読みやすく、DM のモデル全体についてイメージがつかめるものではないかと思う。ただ生成文法の基本的な知識は必要とされる。